希望を耕す

脱資源グローバリズム

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

アリとダリ

少々元気が出ない時に決まって聴く音楽があるとか、決まって観る映画があるとか、そういう方は多いのではないかと思う。私の場合は、そういう時、往年の世界ヘビー級チャンピオン、モハメド・アリの試合の記録動画を見ることが少なくない。勇気付けられるアリの試合はいくらもあるが、無敗の王者同士が相まみえ、アリがプロとして初めてのダウンを喫し、死闘の末に判定で敗れたジョー・フレージャーとの初戦が私は特に好きだった。

アリは私くらいの世代の者にとっては、幼い頃からボクシングが好きか否かにかかわらず知っている、時代のスターだった。自らの信念を貫き徴兵拒否をしたために世界王座を剝奪されボクシング界から追放された後に、執念で復活してくる生き様も、〝Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｇｒｅａｔｅｓｔ〟と連呼するような破格のビッグマウスぶりも、元気と勇気の足りない人々を惹きつけた。

中学生の頃には、同じような理由でもう一人、見ただけで元気の出るスターがいた。サルバドール・ダリだ。あの狂気じみた目に独特のピンとはった髭。独創的な絵画や彫刻の数々もそうだが、アリと同じような何ら恥ずるところのない堂々たる自画自賛にも心惹かれたものだ。

やわらかくて毛深い建築

大学で建築学科に進学が内定した頃、どうやら建築界のスターらしいのだが、今一つ心惹かれないル・コルビュジエをどう受け入れるべきか逡巡している時期があった。そんな時に、私にとって見ただけで元気の出るあのスター芸術家ダリがコルビュジエに投げつけた一言があるという噂を耳にした。

あるべき建築の姿について尋ねたコルビュジエに対して、二〇歳近くも若いダリは「やわらかくて毛深い建築」と言い放ったのだ。ツルツルピカピカの近代建築の五原則とやらを唱え、そのことで神格化されていたコルビュジエに対してもやもや感のあった当時の私には、胸のすくような一言だった。「流石ダリ！」ということで、その後「やわらかくて毛深い建築」という概念が頭を離れなくなった。一体それはどういう建築なのだろうか。

一番ピンと来たのは、『二〇〇〇年から三〇〇〇年まで―三十一世紀からふり返る未来の歴史』（Ｂ・ステイブルフォード、Ｄ・ラングフォード著、中山茂監訳、パーソナルメディア刊、一九八七年）に出てくる「ガンツのセメンテーション工法」（ガンツ工法）というもの。遺伝子工学処理したバクテリアを使ってこしらえた有機接着剤によって様々な粒子を凝集させることで構造物をつくる方法で、何年もの進化の過程を経た後には、大型ブルドーザーを持った一団が、あらゆる環境に入り込み、その場のどんな材料からでも建物をつくることができるようになったとしている。二十一世紀後半か二十二世紀のことである。

その後、私はザンビアの小学校で現地の土と木でできた校舎が崩れているのを見た時に、これだと思った。もちろん世界のなかで見られる日干し煉瓦造にすぎず、ＳＦのガンツ工法とは全く違うのだが、現地で採れる材料でできた建物の、またその土地に戻っていくかのような朽ち方を目の前にし、そこに未来の建築の姿を見たような気がしたのだ。今時の表現だと「サーキュラー・エコノミーに貢献するやわらかくて毛深い建築」ということになろうか。

技術支援のために訪れたザンビアの小学校で出くわした日干し煉瓦造の校舎。
崩れて土に戻っていく姿に未来を感じた。（2000年頃）

○○ショックのその先

もう一つこのザンビアの校舎の姿から思い至ったのが、「脱資源グローバリズム建築」という概念。

二〇〇八年の北京オリンピックの数年前に、中国での需要が急増したことなどがあって、鋼材価格が急騰し、鋼構造で計画していた建物が鉄筋コンクリート造に変更になるというような異常事態を経験した。この時にあの校舎を思い出した。現地の材料でつくり、解体後は現地の土に還っていく、いわばグローバルな資源取引に左右されることのない建築のつくり方。それが一つの未来像だと考え、「脱資源グローバリズム建築」という名称を当てた。

コロナ禍以降、ウッドショック、スティールショックがあり、今では給湯器の調達難や表面の単板部分をロシア材に頼っていた合板の不足等々、経済安全保障に関わる具体的な問題が次々に起こり、建設業界はあちらでもこちらでも右往左往させられている。そうしたなかで、例えば輸入木材の値が高騰し調達難になったウッドショックの関連では、急に国産木材に対する需要が増加し、大きな需要量に応えられるように国産木材の生産供給体制が強化されつつあったりする。もちろんすべての部分を現地材料でつくるという訳には行かないだろうが、大きな方向として「脱資源グローバリズム建築」を目指すべき時期を、私たちは迎えているように思うのだが、いかがだろうか。